

六花



俳句雑誌 りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

12

山田六甲

菊の香や

しん
親

秋冷や野菊の果ての火山帯
火の山の湖に下り来る紅葉冷
残菊や番屋の隅に濡れ蒲団
時雨るるや伯耆の国の石鳴りに
山霊の吐き来る霧の生臭ぞ
紫蘇色に紅葉してをり煙の木
神の湯は恋にぬるかり時雨ても
面白や夜長いびきの息継ぎは
手をつけしのみ混浴秋の暮
堂守になりたや断崖紅葉なす
木は森に隠れて黄葉してをりぬ
鴟の木を贅の長者と名づけけり
雨音のごとくに紅葉揚げてをり
だまし舟つまんだやうな小春かな
水底の石を祝福文化の日

三朝温泉河原湯

三徳山 投入堂

明石城

神鈴を振るやこぼれて稲の花
子は守宮ふやしてばかり反抗期
夜干しの手月に伸ばしてをりにけり
薪能月下にほどく鼓紐
秋夕焼野島が崎へ及びけり
鈴虫の死にし朝あしたのパン焦がす
棒立ちの鯉のひしめく秋天下
天幕の裏の昼餉や小鳥来る
鶺鴒の影におくれて石の上
桐の実やひとり欠けたる姉妹

鵲鴿の影におくれて石の上

笹村 政子

せきれいのかげにおくれていしのうえ ささむら まさこ

夜干の手月に伸ばしてをりにけり

薪能月下にほどく鼓紐

秋夕焼野島が崎へ及びけり

鵲鴿の影におくれて石の上

桐の実やひとり欠けたる姉妹

目の前の石に小さな影ができ、たちまち鵲鴿が降り立った。その瞬間を逃さず心に刻んだのだ。ひらめきのな作品に見えるが其の場面を何度も反芻し推敲を重ねたにちがいない。いつも見えていて見えなかった物を掴み取った。その時を何度も何年も待ち続けてきたご褒美である。これこそ向こうから俳句がやってきて授かった句といえる。芭蕉は「その見えたる光未だ消えざるうちにいい留むべし」と説いた真意は其の場面を句帳に書き留めておけというのではなく、しつかり目と心に打ち刻んでおきなさい。との教えなのだ。句帳に文字で書き留めておく必要はないという人もいる。沢山書き留めておくほうがいいと六甲も思っていたが、最近になってメモをしないほうが、物をしつかり見ることと後から思いおこす愉しさもあることに気がついた。一期一会。

須磨寺に大きな月の出でにけり

藤生不二男

すまでらにおおきなつきのでにけり ふじおふじお

存分に九月の水を使ひけり

白桃をすすする唇濡れしまま

須磨寺に大きな月の出でにけり

風ありてともに行きたる蜻蛉かな

一片の雲となりたる昼の月

技巧を用いず感じたまま（主観）に写生した作品。生臭さを取り払った色気も感じさせながら、何物をも取り払った大きさがある。とりわけこの句で物を言うのは「須磨寺」という固有名詞。須磨寺は歴史的背景の百語を含んでいる固有名詞。その寺に見事な月が上がった。須磨寺と月の見事な取り合わせで俳句の大きな器をつかった世界である。自我を棄てて読者を立てたのだ。須磨で月を詠んだ句では「こんなよい月を一人で見て寝る 尾崎放哉」の著名な句があるが、藤生不二男の句とは心理の上で明暗を分かっている。掲句のように明るく明暗を分かっていて須磨寺の月を詠むのもいいのではないか。なお簡潔さが藤生不二男の真骨頂であろう。一年を締めくくるにふさわしい作品となった。

雪卿集

台風

志方 章子

墓参飛蝗追ひゆく子を叱り
台風の窓を雀の流さるる
かき氷まつ青けふの空に似て
一色しかなき虫の音に倦みにけり
潮風に湿りし髪を洗ひけり

秋夕焼

永田万年青

秋夕焼船に乗り込む家族かな
秋夕焼久しき友の皺深し
秋夕焼横のベンチに二人連れ
一日の終はり佳きかな秋夕焼
秋薔薇花芯にゐたる虫二匹

雪卿集

夏の果

松本文一郎

夏の果製氷皿に水を足す
徒長枝を背伸びして剪る夏の果
日めくりは昨日の日付秋暑し
秋の野に蛇の名問へば山かがし
迎へ火の燃え残りては朝迎へ

残暑

貝森 光洋

敬老日余計なお世話と思いつつ
秋祭りジャンジャカジャンチャンドン屋
父のごと厳しくおわす残暑かな
恥じらいの程の色なりからすうり
十六夜の月のやさしき息遣い

雪樹集

秋の夕焼

筒井八重子

うす雲につつまれてゐる夕焼かな
秋夕やけ飛行機雲もあかね色
秋夕やけ帰るつばめが電線に
秋夕やけあかねの空に夕月が
秋夕やけ近くで子供の声高し

九月の水

藤生不二男

存分に九月の水を使ひけり
白桃をすする唇濡れしまま
須磨寺に大きな月の出でにけり
風ありてともに行きたる蜻蛉かな
一片の雲となりたる昼の月

神鈴を振るやこぼれて稲の花

笹村 政子

神鈴の正しい名称を調べて見たら、インターネットの質問箱の答えとして「鈴（すず）が正式名称だったと思います。鰯口は平べったいヤツです。（お寺にあることが多い）」などと書き込みがある。しかし神具の店のパンフレットには「本坪（ほんつぼ）」としてあり、どうやらこれが正しい名称のようだ。世俗くさいが、本坪鈴は大きなもので一尺もあり、重さは3.8kg。価格は154,224円という。興味のある方は購入して門か玄関に吊しておく、訪問客が呼び鈴の代わりに振ってくれる。其の横に賽銭箱も設置するともっとよい。さて六甲は正式名称にこだわらなくても文芸的には「神鈴」でよいと考える。

蛭雪譚

六甲選

※メモを持ち歩かなくなったら本物。

二十六年十一月号鑑賞

子は守宮ふやしてばかり反抗期

政子のご子息は「守宮」が好きだったようで、捕ってきては増やして行く。親の気味悪がる様子が面白いらしい。反抗期らしい覚えも無いがそれがご子息の反抗期の行動だったと振り返る。もちろん子どもが親に悪さをするのは注意を引くためで、叱って欲しいのだ。ところで爬虫類を異常に嫌う人と、爬虫類の大好きな人との違いの原因は前世の行いや体験によるという説もあるが、六甲も嫌いというより怖い。鱗のある爬虫類は嫌いだ、守宮のように鱗の無い爬虫類も気持ち悪い。だが、壁や硝子に貼り付いてじっとして喉を動かしているのを見ると可愛らしく思える複雑な感情はどこから来るのだろうか、この夏少しあちらの世界を覗いてみて考えたが思い当たらない。ご子息が生きたまま増やしているのか、死んだものを増やしているかは、読者の想像するところだが、守宮よりも子の反抗期を思いおこしている人も多かろう。

六花集

平居 滯子

散骨へ思ひそれぞれ夏の旅
梓川左岸の樹々の秋めける
川底に白き骨片今朝の秋
黙しつづ行く木道の霧に消え
眼裏に清流夏の終りには

廣畑 育子

秋夕焼横目に家路急ぎけり
鯉飛んで秋夕焼の中に入る
鬼やんま風にぐらりと揺れにけり
明け方のうつらに虫のすだくかな
初秋やはまぼうの花すでに散り

住田千代子

夜濯ぎの肌にやさしきものばかり
夜濯ぎや乳の匂へる小さきもの
雲切れて蝸の声つのりたる
生えぎはに汗を滲ませ乳吸へり
昼寝子の時に乳吸ふ仕草せり

赤松有馬守破天龍正義

うず潮の秋夕焼に見惚れけり
崩れぬる秋夕焼の城址かな
叢雲や十六夜の月ほの見えて
引き返す道など見えず彼岸花
帰途につく石鳴き浜や遅れ梅雨

菊谷 潔

沛然と降りたる後の虫の声
名月や大竹藪の颯颯と
十六夜の月をみがくや虫の声
日盛りに虫の音たかし耳の秋
背より高し薄の葉ずれ耳の秋